

ミキ先生と私

入江隆明

武田ミキ先生に初めてお目にかかったのは、私の広島大学定年退官を間近にした昭和五十五年三月十九日であった。広島文教女子大学前でバスを降りて根之谷川の橋を渡り、土手の下に見えたのはおよそ女子大学らしからぬ黒ずんだ校舎である。教育熱心で厳しいおばあちゃん学長と聞いていたので、本学教員としての心構えについてお話があると思っていたら、予想に反して誠に丁寧な

「小学校の女教師を養成するための初等教育学科を、来年四月文学部の中に開設するための準備をしているところ

一、大学人としてともに生きて

でありますので、是非御協力をさせていただきたい。」

とのお言葉で、内心ほっとした。私は高等師範学校を卒業して初めて就職したのが、小学校の女教師を養成する女子師範学校であり、広島大学を退官して私にとって最後の仕事が再び小学校の女教師の養成になったので「これならやれるぞ」と思った。

それから四か月後、ミキ先生のお考えも大分理解できてきた頃の七月二十一日、ミキ先生及び横山先生のお供をして上京することになった。広島駅から新幹線の指示された車（グリーン車ではなく普通車）に乗ったが、お昼になるとミキ先生は可部から用意して来られた三人分のおむすび弁当（梅干し入り、たくあん付き）とお茶を取り出して私たちの前に広げられた。

「こんなものはお召し上がりにならないかもしれませんが、よろしかったらどうぞ。」

私は有難くいただいた。その後、度々ミキ先生の上京のお供をしたが、お昼にはいつもミキ先生特製のおむすび弁当をいただいた。

十一月五日には文部省で、初等教育学科設置計画についてのヒヤリングを受けるために、ミキ先生、学千先生、横山先生のお供をして上京した。はじめにミキ先生が本学の教育理念および設置計画について滔々と丁寧に説明された後、大学設置審議会の委員の方からのいろいろな質問が始まった。その中で

「小学校の教員養成では一般に小学校の何れかの教科にピークを持たせる方法が採られているが、あなたの大学ではお考えになっていないのですか。」

と質問されたので、私から

「この設置計画には述べていませんが、学生は教科の中の一つを選んで研究を深めるための専修の授業も計画しています。」

と答えた。実は専修の授業開設については、ミキ先生に必要性を説明したこともなく、了解も得ていなかった。私の独断で答えたのでおしかりを受けることを覚悟していたのであるが、心よくお許しを得て私は安心した。

昭和五十六年四月八日、初等教育学科第一期生は定員四十人に対し、四十六人が入学することになった。新しく開設された学科であり、学生も保護者も心構えを新たにして入学して欲しいので、入学式後、学生と保護者を一室に集めて特別指導をしたい旨ミキ先生にお願いした。本学ではこのような例はなかったのであるが、心よくお許しになり励ましの言葉までいただいた。その席にはミキ先生にもおいでいただき、はじめにミキ先生からお言葉を賜り、次に私が本学初等教育学科の教育方針・教育計画の特色について説明し、新生には覚悟を、保護者には協力をお願いした。

小学校においては、教科以外の指導力が特に重要である。この指導力を身につけさせるための計画として、臨海実習では水泳指導ができるように、野外活動実習ではキャンプの指導ができるようにし、また、二年度及び三年度で各一週間の観察・参加の本実習をする計画をたててミキ先生にお願いした所、これも心よく承認していただいた。この他のいろいろなお願いも、ミキ先生はいつも心よく許していただき、私が気付かないことも親切に指導援助していただいた。

私にとって少なからず心の負担になり気を使ったのは、毎年二回以上学科の教員全員を学長室に集めて、一人ひとりに学生指導の方針などについて述べさせる会議であった。ミキ先生はこれを学科会と名付けておられたが、私

一、大学人としてともに生きて

達は学長懇談会とよんでいた。多くの場合、各学級の努力目標と現状、生活指導計画、挨拶の指導などの課題を与えられて私たちが一人ひとり述べると、ミキ先生は丁寧にメモをし、次回にはそのメモを基にして質問されることが多かった。学科長の私にとっては骨の折れる会であったが、ミキ先生の教育方針の徹底には効果があったように思う。

「今から考えると、ミキ先生は私にとってお願いがしやすく、頼りになり、親しみ深い学長であった。終わりに、ミキ先生から受けた格別の御恩顧に感謝し、私の度々のわがままのお詫びをし、御冥福をお祈りする次第である。」